学園だより
名古屋電気学園
愛知工業大学
愛知工業大学情報電子専門学校
愛知工業大学名電高校
愛知工業大学附属中学校

目次：

年頭挨拶の要旨	2
2氏に後藤鉀二賞	3
センバツ出場	4
サイエンス大賞	5
設置校入試概況	6
附中生世界大会	7
愛名会だより	8

発行所
名古屋電気学園
〒470-0392
豊田市八草町八千草1247
TEL (0565) 48-8177

後藤淳理事長が年頭挨拶で教職員に学園百年の歴史を思い起こし次の百年へ向け自覚促す

平成二十四年のスタートを切るにあたり後藤淳理事長、後藤泰之学長が一月七日、学園本部で学園、大学、専門学校の教職員に対し年頭挨拶を行い、創立百年となる学園の歴史の意義、記念行事等の取り組みを語り、百年を迎え、気持ちを新たに職務に励むように呼びかけました。

後藤淳理事長、後藤泰之学長は一月七日、八草キャンパスの第二本部棟五階会議室で学園、大学、専門学校の教職員に年頭挨拶を行いました。その中で理事長は「今年は学園が一九一二（大正元）年にスタートして百年を数えます。一世紀という長い間に大勢の教職員が（学園に）携わり、卒業生も中学から大学まで合わせて十万人を超える人を社会へ送り出しました。昇竜などといわれる今年の干支の通り、元気よくスタートを切りたい」と挨拶しました。

学園等の教職員に年頭の挨拶をする後藤淳理事長

また、学長は「大学は学園百年の中で今年五十三年となるが、これからも『ものづくり教育』、『実学教育』をますます充実、発展させて次の百年を目指して頑張っていきたい。私学を取り巻く状況は厳しいが、皆さんには元気を出してもらい『愛工大は元気だぞ』と、社会へアピールしていきたい」と教職員に訴えました。

【写真は、理事長、学長の年頭挨拶を聞く教職員】

高校・附中でも年頭挨拶

後藤淳理事長は前日の一月六日、（名古屋市千種区の）若水キャンパスの南校舎地下一階大講義室で行われた高校・附中の合同職員会議に出席、教職員に年頭の挨拶をしました。その中で「学園は一九一二年に創立し、今年で百年を迎えるが、いろいろな変遷を経て現在、大学をトップに四つの学校を擁する学園になった。百年の歴史の中に皆さんや先輩、生徒がいます。それを次へ伝える大事な年でもあります。勉強も大事ですが、生徒一人ひとりの能力を引き出し、伸ばして社会や日本のために活躍できるようにしてやるのも大事です。皆さんには百年を迎え、気持ちを新たに頑張っていただきたい」と話しました。

【写真は、理事長の話に耳を傾ける高校・附中の教職員】

（理事長、学長の年頭挨拶要旨は次頁に掲載）

大学姉妹校の東南大から郭広銀・校務委員会主任来学

東南大（中国・南京市）の代表団が十二月五日、八草キャンパスを訪れ、後藤淳理事長・総長、後藤泰之学長ら学園、大学幹部と交流を深めました。代表団は団長で初来学の郭広銀校務委員会主任ら六人で、団員の二教授が学生に特別講義を行いました。

本部棟内の会議室で歓談し、理事長の歓迎の言葉に対し、郭校務委員会主任は「総長・理事長先生が長年にわたり、日中友好のため尽力してきたことに深く敬意を表します」と述べました。また、学長とは両大学間の学術交流について一層の推進を図ることで同意しました。この後、一行はキャンパス内の施設を見学しました。

後藤淳理事長と握手する郭広銀東南大校務委員会主任

理事長、学長の平成２４年年頭挨拶要旨

後藤淳理事長

新しい年を迎えまして、おめでとうございます。

この冬は、非常に厳しい寒さです。身の引き締まる思いをするぐらい冷たい日日が続いています。スタートに当たり、そういう気持ちになるのは、（緊張感があり）いいと思います。

昨年は皆さんご存知のようにいろいろな災害が起きました。東日本大震災があり、津波が起こり、（東電福島第一）原子力発電所の事故もありました。台風もやってきました。悪いことが立て続けに起きました。良いことで思い出すのは世界大会で優勝した（女子サッカーの）「なでしこジャパン」でしょうか。やはり女性の力が日本を元気づけてくれたと思っています。

昨年一年間はそういう状況でしたが、学園としては高等学校で吹奏楽部が（吹奏楽コンテストとマーチングコンテストの二部門で）金賞を獲り、この春には甲子園に野球部が出場できるという希望が、すぐにですが待ち構えています。

そういう明るいニュースを頭に置いて、今年は学園が一九一二年、大正元年に（名古屋電気学校として）スタートして百年を数える記念すべき年になります。百年というのは考えてみると、〃一世紀〃という実に長い年月です。その間、戦前、戦後、それ以後と分かれて（学園に）携わった人は数知れず、卒業生も高校と附中で約５万人、大学も５万人を超える人を社会に送り出してきました。

そう考えると（今年は）百年の歴史を思い起こし、けじめをつけて新しい次の百年に向かって踏み出す時だと思います。干支でいうと辰年にあたり「昇竜」とか「奮い立つ」という言葉がありますが、そういう気持ちを胸に元気よくスタートを切りたい。

百年を迎えて「（まさに百年目の）その記念すべき場にいる」という気持ちが私たちを元気づけてくれ、そういう思いの集積が百年だと思います。

年度でいうと、もうじき締めくくりとなります。新しい二十四年度を迎える準備をこれから春にかけて進め、新年度への取り組みをしながら夏から秋にかけて（学園創立）百年という運びにもっていきたい。

それではこの一年、皆さんのいつも変わらぬ元気でスタートを切り、寒さに負けず進んでいきたいと思います。

後藤泰之学長

皆さんあけましておめでとうございます。

学園は大正元年、「社会に役立つ技術者の育成」ということでスタートし百年となります。実学教育を一貫して実践、その伝統が今の中学校、高等学校、専門学校そして大学に脈々と受け継がれてきています。その百年の中で、大学は今年五十三年目となります。社会のニーズに合わせて形は変わってきていますが、精神は変わらず、これからも「ものづくり教育」、「実学教育」をますます充実、発展させて次の百年を目指して頑張っていきます。

百周年ということで様々な記念行事が計画されています。一番大きいのは今、若水（名古屋市千種区）で造られている「百周年記念館」（仮称）です。そこは百年の歴史を展示するメモリアルギャラリーとか、ものづくり工房、実習室、体育館、吹奏楽部の練習場等が中に入ることになっています。「ものづくり」の実習場というか工房は、本学園の“ものづくり教育”の中心地として活用していきたいと思っています。

とくに高校が一番使うと思うが、ここで「ものづくり」の楽しさ、感動を味わった生徒をぜひ大学へ送り込んでほしい。また、大学では２号館、５号館建て替えということで、これから準備を進めていきます。建物はシンプルでコンパクトとなりますが、中身は充実したものにしていきたい。

私学を取り巻く状況は、非常に厳しいものがあります。少子化、長引く不況、それに昨年の震災、原発事故等による科学技術に対する不信感も非常に大きいものがあります。その中で我々は「ぶれてはいけない」と思う。本学の「教育モットー」、それから「ものづくり精神」といったものは〃ぶれない〃で、学生に伝えていかなくてはと思います。先生方にもこういう時だからこそ元気よく学生への教育、研究に取り組み、そういうものを学生に、伝えていってほしい。

入試が終わると新しい年度を迎えますが、厳しい時だけに元気を出し、「愛工大は元気だぞ」と、世間にアピールしていきたい。運動部が元気だと大学も元気がもらえるので、高校に負けず、日本一を目指して頑張ってほしい。厳しい年ですが、健康に気をつけて元気よく乗り切っていきましょう。

小嶋憲三・大学副学長、伊藤宏樹・高校教諭に後藤鉀二賞

後藤鉀二先生奨学記念会(会長・後藤淳理事長)は1月21日、小嶋憲三・愛工大副学長、伊藤宏樹・愛工大名電高校教諭、吹奏楽部顧問の両氏に「平成23年度後藤鉀二賞」を授与しました。同賞は、科学技術、スポーツ振興等で学園の発展に功績を挙げた学園各設置校の教職員に贈られるもので、受賞者は今回を含め79人にのぼります。

小嶋憲三・愛工大副学長

伊藤宏樹・名電高教諭

小嶋副学長は、本学の工学部電気工学科助手として採用されて以来、44年間にわたり電気・電子材料、電子デバイス工学を専門に同研究分野の発展、学生の教育に努め学園創立の趣旨である「社会に出てすぐに役立つ技術者の育成」を実践し、社会に有能な人材を送り出しました。また、入試部長ほか高大連携推進室長、副学長等の多くの要職を務め研究、教育の充実から管理・運営面まで大学の発展に多大の功績を挙げました。

また、伊藤教諭は7年前に愛工大名電高校の音楽専任教員に就任、その傍ら吹奏楽部の顧問として部員の指導を担当。現在まで「地域社会に愛される学校」という本校の教育指針に沿って吹奏楽部員と地区の交流等に努める一方、刑務所での演奏会慰問など数多くのボランティア活動にも力を入れ、全国に「愛工大名電」の名を知らしめました。さらに、昨年10月の全日本吹奏楽コンクール、続く全日本マーチングコンテストで相次いで金賞に輝き、ダブル受賞という吹奏楽部初の快挙を成し遂げ、学園の発展に大きく寄与しました。

授与式で後藤鉀二先生の思い出を語る後藤淳理事長

授与式は八草キャンパス内の本部棟内で行なわれ、後藤泰之学長ら出席者全員が後藤鉀二先生の遺影に黙とうした後、記念会会長の後藤淳理事長が後藤鉀二先生の思い出に触れながら賞の趣旨を説明し、小嶋副学長、伊藤教諭に「今後とも後輩の指導に努めていただきたい」と述べ、両氏に賞状と賞牌等の記念品を贈りました。それに対し小嶋副学長、伊藤教諭は「このうえない名誉です」と謝辞を述べました。記念写真を撮った後、理事長ら出席者が2人を囲み、和やかに歓談しました。

後藤淳理事長が中国の招きでピンポン外交40周年式典出席

NPO法人愛知県日中友好協会の後藤淳会長一行十人が十二月二十日から二十二日まで中日友好協会の招きで北京を訪問し、「ピンポン外交」40周年記念式典に参加しました。

一行は二十日夜、井頓泉友好協会副会長主催の歓迎会に参加。また、二十一日午前、中日友好協会で唐家せん（※）中日友好協会名誉顧問と会談しました。会談には劉徳有元中国文化部副部長、中日友好協会の陳永昌、王效賢、井頓泉の三副会長、劉鳳岩中国卓球協会秘書長、山田重夫日本大使館公使らが同席。

唐家せん中日友好協会名誉顧問㊨に絵画を贈呈する後藤淳理事長㊥

席上、唐家せん名誉顧問が同訪中団の来訪に対し歓迎の意を表した後、「後藤鉀二先生が様々な困難と妨害を克服し第31回世界卓球選手権大会に中国卓球代表団を招聘し、世界的に有名になった『ピンポン外交』の土台をつくった」と挨拶しました。それに対し後藤淳理事長も「ピンポン外交の歴史的事実と先駆者の思いを次代を担う若い人々に伝えていかなければなりません」と述べました。

会談後、中国人民対外友好協会、中日友好協会等主催の「『ピンポン外交の回想』出版記念式典」および（今年八月に北京で開催する）「中日友好都市中学生卓球交換大会調印式典」が中国人民対外友好協会講堂で開催され、約八十人の日中双方の関係者が参加しました。

（文は、岡崎温愛知県日中友好協会副会長）

※せんは王偏に旋です。

愛工大名電高野球部が一月二十七日、三月二十一日から阪神甲子園球場で開幕する「第84回選抜高校野球大会」の出場校に決まりました。センバツ出場は七年ぶり九回目です。

日本高野連から午後三時二十分ごろ、校長室に出場決定の電話がありました。「素晴らしい贈り物ありがとうございました。謹んでお受けします」と応対した佐藤忍校長は直ぐに、北校舎玄関前に勢ぞろいした部員に朗報を伝えました。

その瞬間、全員が一つになって喜びを表現。吹奏楽部による祝福の演奏に合わせ、詰めかけた生徒、野球部員の保護者から一際大きな歓声が上がりました。

さらに、高校入り口横の時計台に「祝　甲子園出場　野球部」の大懸垂幕が掛けられると、部員は倉野光生監督や校長らを次々に胴上げし、うれしさを爆発させていました。監督やエースの浜田達郎投手、佐藤大将主将の周りは報道陣が取り囲み、カメラのフラッシュが絶えませんでした。野球部は、昨年の秋季愛知県大会、続く秋季東海大会で優勝を果たし、センバツ出場の切符を手にしました。

【写真上は、喜びを表現する部員。下は大懸垂幕】

金賞をダブル受賞の愛工大名電高吹奏楽部を学園表彰
恒例の「第45回定期演奏会」にはファンらで埋まり盛況

「第45回定期演奏会」が一月八日、名古屋市の名古屋国際会議場・白鳥センチュリーホールで昼、夜の部の二回、行われました。昼の部では、後藤淳理事長が舞台から観客に挨拶、同部史上初の、吹奏楽コンクール、マーチングコンテストの両全国大会で金賞をダブル受賞したことを披露すると、満員の観客席から一段と大きな拍手が起こりました。演奏会では伊藤宏樹顧問の指揮で勇壮な「双頭の鷲の旗の下に」（ワーグナー作曲）で幕を開け、交響詩「ローマの松」（レスピーギ作曲）等をはさみ吹奏楽アレンジではおなじみの「コパカバーナ」（バリー・マニロウ作曲）まで指揮者と部員が一体となり、吹奏楽コンクール金賞校にふさわしい磨かれた演奏技術を余すところなく披露しました。

この間、マーチングバンドによるステージドリル２０１２「天と大地の恵み」が披露され、観客を魅了しました。

記念の盾贈る

学園は十一月二十八日、一月六日の二回に分けて、▽全日本吹奏楽コンクール高校の部（十月二十三日）▽全日本マーチングコンテスト・高校以上の部（十一月二十日）で、金賞を受賞した吹奏楽部を表彰し、両全国大会に出場した部員に一人ひとりの名前を刻んだ記念の盾を贈りました。

一月六日に南校舎で行われたマーチングコンテストの表彰では、ドラムメジャーの石田浩康君（普通科三年）が部員を代表し、後藤淳理事長から賞状と記念の盾を受け取りました。

代表の石田君を前に金賞受賞を称える賞状を読み上げる後藤淳理事長

大学が高校生の科学力、ものづくり支援―「AITサイエンス大賞」―

愛工大は十一月十二日、東海地方の高校生を対象にした「第10回AITサイエンス大賞」を八草キャンパスで開催しました。今回は「自然科学部門」に十四校（十九件）、「ものづくり部門」に十五校（十八件）の応募があり、ステージ発表、パネル展示発表で取り組んできた実験や研究成果を披露しました。

研究発表に先立ち開会式が10号館二階大講義室で開かれ、後藤泰之学長がサイエンス大賞の意義を説明した後、「応募論文は熱意あふれるものばかりでした。他校との交流も深め、充実した一日を過ごしてください」と挨拶した後、各発表が行われました。「ものづくり部門」では、レスキューロボットの研究・開発、手作り放射能測定器など東日本大震災を受けた研究成果もあり、注目を集めていました。

審査の結果、**「自然科学部門」優秀賞に▽向陽▽時習館A▽多治見北（写真左上から順に）、「ものづくり部門」優秀賞に▽土岐商▽豊橋工▽愛工大名電（写真右上から順に）**―が選ばれました。残る各校には奨励賞、努力賞が贈られました。

また、開催十回目を記念してサイエンス大賞開催に功労のあった高校の先生を表彰しました。

ものづくり部門優秀賞受賞校

自然科学部門優秀賞受賞校

科学への芽は子供から―幼稚園でロボット・かがく実験ショー

愛工大の教員、学生らによる「どきどき、ワクワクロボット・かがく実験ショーがやってくる」が一月二十六日、あいわ幼稚園（名古屋市名東区）で開かれました。

「園児に科学のおもしろさが分かるようなことができないか」と大学に打診があり、今回のショーが実現。同園の遊戯室で年長組の九十三人を対象に、佐伯平二客員教授がドライアイス等を使った科学実験、古橋研究室（古橋秀夫電気学科教授）の西山禎泰・鉄人28号プロジェクトディレクター、学生二人が、様々なロボットによるショーを披露しました。

佐伯客員教授は、身近にある物を材料にした実験で園児を引きつけました。中でも、ドライアイスでペットボトルを飛ばし、ドライヤーでカップめんの容器を空中に浮かせる実験が大人気でした。

また、西山プロジェクトディレクターは古橋研究室の鉄人プロジェクトで製作された鉄人28号ロボットや市販のロボットを操作し、ロボットの魅力を分かりやすく教えました。この後、園児は大学で用意したミニロボット、会話もできるロボットを自分で実際に動かしたり、話しをして楽しみました。

写真上は、佐伯客員教授のカップめんを空中に浮かべる実験。下は、西山ディレクターのロボットショー

平成24年度入試概況

学園設置校のトップを切って、一月二十一日から愛工大附属中学の奨学生、一般入試が始まり、続いて愛工大前期日程一般入試が二十七日～二十九日、愛工大名電高推薦入試が三十一日、同一般入試が二月七日と続きました。

愛工大

前期日程・A方式、M方式の一般入試は、八草キャンパスのほか自由ヶ丘キャンパス、津、金沢など全国各地の試験会場で行われました。前期日程の志願者総数は三学部七学科十四専攻の募集人員六百三十八人に対し、四千二百八十四人と昨年を上回りました。

初日の八草キャンパスには厳しい冷え込みの中、風邪予防のマスクをした受験生が次々とバス、マイカーで詰めかけ、試験会場の10号館入り口で会場を確認した後、足早に教室に向かいました。試験官の教員から試験に関する様々な注意等を受けた後、緊張した表情で最初の数学の問題に鉛筆を走らせていました。

【写真上は、次々と試験会場に詰めかける受験生。下は、緊張した表情で問題用紙の配布を待つ受験生】

愛工大名電高

推薦入試に続き、マンモス入試となっている一般入試が二月七日、本校と近くの大手予備校の二会場で行われました。普段は行事やスポーツ等の部活動に使われている広い喬徳館も試験会場にあてられ、大勢の受験生で埋まり、緊張した雰囲気に包まれていました。

大手予備校内の試験会場でも、本校と同じく受験生が国語から始まる試験問題に真剣に取り組んでいました。志願者総数は、推薦を含め約四千人（定員は普通科、科学技術科、情報科学科合わせ六百七十四人）でした。

【写真は、一般入試受験生で埋まった喬徳館会場】

愛工大附属中学

県内で最も早い一月二十一日の奨学生入試は小雨混じりの厳しい寒さの中で行われ、緊張した表情の受験生が保護者に付き添われ、試験に臨みました。

翌日の第一回一般入試では前日を大幅に上回る受験生が詰めかけ、国語の問題を皮切りに入試問題に取り組んでいました。学校入り口付近では大勢の塾関係者が受験生に声をかけ、激励していました。

約百人の定員に対し、志願者数は奨学生、一般入試合わせて六百三十一人にのぼりました。

【写真は、塾関係者の激励を受け試験場に向かう一般入試の受験生、保護者】

初の東南大語学留学生

愛工大は姉妹校・東南大学で中国語を学ぶ初の「短期語学留学」を二月二十六日から三月十日まで中国・南京市の同大で開催しました。

参加したのは学生、院生合わせて十人。参加者は、渡航前の二月十七日に自由ヶ丘キャンパスで開かれた中国語講習会で中国語を勉強、留学に備えました。講師役は経営学部日本ビジネスコースで学んでいる中国人留学生十人。受講生は、中国人留学生からマンツーマンで発音等の指導を受けていました**＝写真左。**

快挙!! 愛工大附中の小川翔大君がフェンシング世界大会出場

世界ジュニア・カデフェンシング選手権大会出場の小川翔大君

愛工大附属中三年の小川翔大君が三月三十一日～四月八日、ロシア・モスクワで開催される「世界ジュニア・カデフェンシング選手権大会」に出場が決まりました。

小川君は一月の「第19回JOCジュニア・オリンピック・カップ・フェンシング大会」カデ（一九九五～九八年生まれ）男子サーブルで優勝、また、国内各大会でも好成績を挙げランキングポイント2位となりました。その結果、日本フェンシング協会から「世界ジュニア・カデ選手権大会」代表選手に選ばれました。

小川君は二年の時、友人に誘われ陸上部から初めて体験するフェンシング部に転部し当初、フルーレをやっていました。その練習の中で自信のある“瞬発力”を活かせるサーブルにかえたところメキメキと頭角を現し、各大会で好成績を挙げ「世界ジュニア・カデフェンシング選手権大会」の代表選手に選ばれました。

学園は小川君、川嶋範夫中学フェンシング部監督、小西貴之同コーチを学園表彰しました。二月二十日、附中校長室で後藤淳理事長が小川君ら三人を表彰、世界大会出場に繋がったJOCジュニア・オリンピック大会の優勝を称えました。

後藤淳理事長から学園表彰される小川翔大君、左端は佐藤忍校長

学園トピックス

◇愛工大、新たに中国、タイの大学と国際交流協定締結

本学は中国の揚州大学（江蘇省揚州市）、タイのコンキャン大学（コンキャン市）の2大学と新たに学術交流協定及び学生交流協定を結びました。揚州大とは2年前に同大学から本学教員を通して学術交流協定の申し入れがあり、昨年6月に揚州大代表団が来学。それらを受けて9月、本学国際交流室室長の櫛田玄一郎機械学科教授、服部洋兒経営学科教授が揚州大へ赴き学術交流等に伴う事前調査を行い**＝写真右**、12月に後藤泰之学長と郭榮学長が署名した協定書を取り交わしました。4月から揚州大大学院生1人を研究生として受け入れ、井上眞一応用化学科教授が指導する予定です。また、コンキャン大学とは昨年7月、タイで開催された「流れ分析国際会議」で酒井忠雄応用化学科教授と交流のあった同大教授から、「愛工大で開発している先端のフローインジェクション分析法」に関する共同研究の要請がありました。両大学間で協定内容等を詰めた後、12月に両大学長が協定書に署名調印、締結しました。コンキャン大学の大学院生が4月に来学、研究生として酒井教授、手嶋紀雄准教授の指導を受けて1年間研究に取り組む予定です。

◇愛工大名電高でロボットコンテスト、合唱発表会

1年生が2月16日、校内の喬徳館、武道場を会場に開き、クラスやグループで取り組んだ歌声、ロボットで競い合いました。

ロボットコンテストは、科学技術科、情報科学科の専門学科生徒がチーム（1チーム各3～5人）に分かれて、工業技術基礎の授業で作ったセンサーロボットを決められたコース上を走らせ、スタートからゴールまでの時間で争いました**＝写真右**。合唱発表会は、普通科のクラス対抗で行われ、それぞれが練習の成果を広い館内いっぱいに響かせ、先生の審査を受けました**＝写真左**。

成績は、ロボットコンテストが①Think②Wゆうき③すべてはクリストファーの為に。合唱発表会が▽金賞　C組（平和の鐘）▽銀賞　D組（コスモス）▽銅賞　F組（明日へ）▽指揮者賞　豊田沙弥さん（C組）▽伴奏者賞　森遼太君（D組）ーでした。

愛名会だより

名古屋電気学園後援会組織・学校法人名古屋電気学園愛名会と中部産業連盟は十一月三十日、名古屋市中区の名古屋国際ホテルで、宇宙航空研究開発機構の川口淳一郎教授（写真左）を講師に講演会を開きました。奇跡の帰還を果たした小惑星探査機「はやぶさ」のプロジェクトマネージャーを務めた川口教授が「『はやぶさ』式思考法―日本を復活させる24の提言―」と題し「はやぶさ」を通じ日本の科学技術の素晴らしさを紹介しました。

神尾隆愛名会会長、竹内弘之中産連副会長らの挨拶に続き、川口教授の紹介があり講演に入りました。

川口教授は京都大卒で東京大大学院を修了後、旧文部省宇宙科学技術研究所に入り教授に就任。一九九六年から二〇一一年まで「はやぶさ」のプロジェクトマネージャーを務めました。講演ではコピーではトップに立てないと語り、前人未到の地球の誕生のカギを握る小惑星「イトカワ」に日本の探査機を到達させたうえ、小惑星の試料サンプルを持ち帰る「はやぶさ」の計画、打ち上げ、帰還までの軌跡を聴衆にドラマを聞かせるように講演。映画化された「はやぶさ」の撮影に関わる話も交えて、楽しませました。

また、大気圏突入で燃え尽きる「はやぶさ」に〝ふるさと〟の地球をひとめ見せてやろうと努め、それが最後に送信してきた切れた地球の映像写真だった―というエピソードも披露し、満席の聴衆を感動させました。最後に次の小惑星探査計画についても力強く言及し、講演を終えました。

学内企業展に三千人超の学生来場

愛工大キャリアセンターと愛名会による「平成二十四年学内企業展」が二月二十一日、二十二日、八草キャンパスの鉾徳館で開かれました。企業展は来春卒業予定の愛工大、愛工大情報電子専門学校の学生、大学院生らを対象に、企業情報や求人状況等の就職情報収集の機会になればと毎年、開催しています。今年は二カ月遅い就職活動の解禁から両日とも学生の熱気に包まれていました。初日は開場に先立ち会場内で開会式があり、小嶋憲三副学長らの挨拶に続いて、就職担当教員と参加企業の名刺交換が行われました。

真新しいリクルートスーツ姿の学生が開場と同時にお目当ての企業ブースに詰めかけ、人事担当者から事業内容、本年採用見通し、企業から求められている人材等の話に聴き入っていました。例年通り、人気企業のブースは大勢の学生で埋まり、席の空く間がないぐらいでした。また、企業側も今年は短期決戦とみており、例年以上に説明にも熱がこもっていました。各学科の教員も会場内を回り、学生を励ましていました。

二日間で参加企業は合わせて三百九十三社、来場した学生は延べ三千二百五十四人（キャリアセンター調べ）と昨年をいずれも上回り、盛況でした。

【写真は、初日から学生らで埋まった「平成二十四年学内企業展」の会場】

編集後記

▼早いもので東日本大震災から一年となります▼地震が起きた時、災害の規模は全く予想がつきませんでした▼原子力発電所の事故も重なり、災害を大きくしました▼「天災は忘れた頃に来る」と言われていますが、日本はもともと地震国であったはず▼なぜ予測や対策が十分でなかったのか問われています▼反対に、「備えあれば憂いなし」とも言われるように、やはり日々の備えが欠かせないのでは▼名古屋電気学園は今年、創立百年のメモリアルイヤーです▼百年という長い歴史を経て、現在、愛知工業大学を含め四校の設置校を擁する理工系総合学園として発展を遂げています▼戦争など厳しい時代を乗り越え、ここまで発展できたのは何故でしょう▼災害への備えでありませんが、日ごろから「備え」、つまり各設置校の整備、中身の充実に努めてきたからとも言えます▼「ローマは一日にして成らず」　（久）